

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 331



1999 JUNE



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2000年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

3週間で登るヒマラヤ

H A Jでは、長い休暇のとれない方を対象として、成田を出発して登山を行い成田に帰着するまでの期間を「3週間程度」で済ませる登山隊を企画しています。概略は、往復に2週間、登山期間1週間程度です。当然対象山岳は「6千メートル級の山」となります。期間は、7月中旬～8月下旬の3週間です。具体的には中国、インドとなります。来年夏に休みをとれる方は早目にご連絡下さい。希望者が早く決定できれば良い企画が生まれます。負担金は60万円程度です。

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功しています。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 申し込み:H A J事務局まで

表紙写真

カンチェンジュンガ北稜の7,600m付近から振り返ると、ジョンサン・ピーク(7,483m)の頂上プラトーをのぞむことができた。プラトーの右はしはドローモ(7,442m)、左はしがアウトライヤー(7,044m)その手前はドローモ(6,885m)である。

(田辺 治)

ヒマラヤ No.331

1. イエティの存在を追う(II) 1994年イエティ捜索隊リポート
13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
16. カラコルム 1998 中川 裕
18. 中国高峰登山15年小史(22)西藏その8
24. 寸感・事務局日誌

イエティの存在を追う(Ⅱ)

1994年 イエティ 捜索隊リポート

——ダウラギリ山群コーナボン・コーラ周辺における
イエティ捜索活動概要と結果(その1)——

* 未知なるものへの探究 ——イエティの存在の確認及びその撮影——

ヒマラヤの山中には、既知の動物とは異なるイエティ(雪男)といわれる獣の棲息に関する情報は多い。この度、その具体的な情報を綿密に分析、検討した結果、イエティという獣が例えどのようなものであれ、実在するとの考えにいたり、その実像の撮影と正体の確認を目指す捜索活動を行なった。その概要及び結果は下記の通りである。

《捜索隊の概要》

- | | | |
|---------|---|------------------------------------|
| 1. 隊の名称 | 1994年イエティ捜索隊 | 1982ダウラギリ I (8,167m)副隊長 |
| 2. 期間 | 1994年7月29日~10月10日 | 隊員 田中成幸 1935年6月生(59才) |
| 3. 捜索地域 | ネパール・ヒマラヤ、ダウラギリ山群、コーナボン・コーラ及び、グルジャ・ヒマール南東稜付近 | 高崎市 |
| | ※ベース・キャンプを設営したコーナボン・コーラは、ネパールの首都カトマンズの西方、約250kmに位置するダウラギリIV峰(7,661m)の南面にある。 | 1982ダウラギリ I (8,167m)隊長 |
| | | 隊員 村上和也 1955年3月生(39才) |
| | | 調布市 |
| | | 1981ドルジェ・ラクパ(6,981m)初登頂 |
| 4. 日程概要 | 7月29日 先発隊日本出発 | 1982ダウラギリ I (8,167m)冬期マナスル(8,163m) |
| | 8月1日 本隊日本出発 | 1983ローツェ(8,516)登頂 |
| | 5日 カトマンズ→ポカラ←バグルン | 冬期サガルマータ(8,848m)登頂 |
| | 6日 キャラバン出発 | 1985K 2 (8,611m)登頂 |
| | 13日 } ベースキャンプ建設 | サガルマータ(8,848m) |
| | 9月22日 } 捜索活動(40日間) | 隊員 熊田雅史 1956年2月生(38才) |
| | 24日 ベースキャンプ撤収・下山 | 松戸市 |
| | 10月4日 カトマンズ着 | 1981ガンガプルナ(7,455m) |
| | 10日 帰国 | 1983ヌン(7,135m)登頂 |
| 5. 隊の構成 | | 1985K 2 (8,611m) |
| 隊長 高橋好輝 | 1943年1月生(51才) | 1986冬期バルトロ偵察 |
| | 三鷹市 | 隊員 古山和彦 1964年12月生(29才) |
| | 1971ダウラギリIV(7,661m) | 川崎市 |
| | 1975ダウラギリIV(7,661m)登頂 | |

《時期の設定》

BC (3,350m) 以上での実質的な搜索期間は、8月14日から9月24日までとした。ネパール、ヒマラヤは、モンスーン・シーズン（雨期）である。降雨、視界不良等、不利な条件もあるが、あえてこの時期を選んだ理由は以下の通りである。

1. 4,000m以上の視界のひらけた地点に動物の出没する環境
2. 搜索活動の安全性
3. その他、隊員及び撮影チームの事情等

1. について

野生動物の発見と撮影は見通しのきかない樹林帯では困難である。視界のひらけた高山帯での捕捉に絞った作戦をとることとした。

動物が高山帯に現れる条件すなわち雪線の上昇による、より高所に新たな餌場の出現、及び山麓では放牧が入る等の環境的な面からも動物が高所に出没すると推測し、この時期を選定した。

ダウラ・ヒマール南面は、例年であれば9月下旬頃に雪線の上昇が最大となり、7月～9月には気温も高く、4,000mラインにおける植生は最盛期を迎える。草食獣には新鮮な餌場となり、同時にそれを狙う捕食獣も高山帯に移動すると思われる。イエティについても獣の一種であるかぎり、同様と考えられる。

2. について

過去に報告された、この付近でのイエティらしき獣の姿及び足跡の目撃情報はいずれも雪線付近に多い。例年、この時期における雪線は約5,000mである。このラインに出没する獣を観察・撮影、また、より広範囲な視野を得るため、監視拠点は南東稜上の4,600m付近に設置することが条件となる。ルート上の雪崩対策及び、稜線上での調査活動も雪の少ないこの時期が安全であり、かつ展開効率も良い。

3. について

参加者及び協賛関係の諸事情から若干の調整を必要とした。その結果、2週間ほど出発を早め、終了のタイムリミットを9月24日にするということとした。

《気象》

ネパールは雨期であり、雨は覚悟していた。しかし、ガスの発生は予想をはるかに上回り視界不良が続いた。1975年の同時期と比較して今年は気温の高さにおいて際立っていた。Cポイント(4,600m)での最低気温は、マイナス2～3度を数回記録したにすぎない。40日間の期間中、最高所のキャンプ地(Cポイント)での降雪は3回のみであり、それも短時間で消え積雪とはならない。これは、さらに高所の5,800m付近でも同じで、降雪回数こそ多いが白くなる程度で、やはり短時間で消える状況であった。同様に残雪量も少なく、谷の雪渓は75年当時の約半分、上部の懸垂氷河の規模も縮小している。

例年、この時期の雪線は5,000mラインであるが、今年は雪線と判断できるラインはミャグディ・マータ(6,273m)まで見上げても確認することはできなかった。これは、数年にわたり温暖な気候条件が続いた結果と考えられる。また、この現象は植物の生育状況にも表れ、BC(3,350m)以上での生育状態が良くかつ密生している。これは気温の高さ及び雪量の少ないことから、雪解け時期が早まったことに関係していると思われる。しかし、温暖な環境のわりには高山植物の花期は早く終わり、稜線上の苔類の紅葉が始まった日時も早い。植生の生育サイクルが、全体的に前にずれこんだ印象である。

《結果として》

視界不良の状況が続き、各監視拠点からの観察は制約を受けた面もあるが、この時期には4,600m以上の稜線付近でもっとも多くの動物が目撃されている。

この期間設定は狙いとして間違っていないと考えている。しかし、さらに効果的な観察を行なうためには、搜索期間を2週間程、後に設定するべきであった。9月下旬頃より天候も回復し、広範囲にわたり監視可能となる。

《 捜 索 活 動 》

《監視網—キャンプ展開—》

グルジャ・ヒマール南東稜、及び稜のコーナボン・コーラ側斜面、標高3,500m～5,100m、東西幅約2km。過去においてイエティらしき獣の目撃例と足跡の発見が集中した場所である。この範囲を立ち入り禁止の空白地帯（Dゾーン）とし、これを包囲する形でAポイント（3,450m）、Bポイント（3,800m）、Cポイント（4,600m）と3地点に監視拠点を配置、この範囲内であれば、どこに出没しても撮影可能な態勢の布陣を敷く。

Cポイントは南東稜上にあり、南側の谷（タレジャ・コーラ）をも眼下に観察できる地の利を得た拠点で、広範な面を常時視野に押さえる配置で出没に備えた。結果として予定通りの展開はできたが、Cポイントへの物資補給やメンバー交代時のルート設定に判断ミスが生じた。

当初の計画ではBCより直接Cポイントまでバイパスルートを工作する予定であったが、その現場は補給路としては困難であり、他にルートを求める時間的余裕もないまま、やむなくDゾーン内をルートとした。これは大きな誤算であった。5～6日ごとに登下降することとなり、空白地帯としての意味が失われた。コーナボン・コーラ側から行動し、南東稜上にキャンプを設ける限り避けられぬ欠点である。

今後は包囲網作戦にこだわることなく、タレジャ・コーラ側の入山許可をも取得し、稜線通しに補給を行なう方法をとればあらゆる面で有利となる。

《捜索活動》

捜索活動は、各キャンプ地より双眼鏡、単眼鏡による観察を基本としたが、ほかセンサー作動のオートドライブ・スチール・カメラ、自動撮影ビデオ装置、同赤外線感知のビデオ・カメラ等の設置により捕捉を試みる。さらに、隊員が直接行動としての捜索も行なった。

各キャンプ地点からの観察は、双眼鏡と、より倍率の高い単眼鏡を常備する。Bポイントはほかに暗視単眼鏡も装備し夜間の監視も行なう。性能

的にも数量的にも十分なものであった。しかし、予想外にガスの発生が多く、特に午後から夕刻にかけての動物が活発に活動する時間帯が視界不良となるため、効果的な観察ができない。結果として、直接行動で調査する比重が高くなった。

《自動撮影機器の設置》

スチール・カメラ1台と8mmビデオ・カメラ1台を主に南東稜稜線上にセットする。スチール・カメラは、オートドライブ広角レンズとフラッシュを使用。センサーの反応は最大15mで作動する。

8mmビデオカメラは最大7mでセンサーが反応した後、5秒後にカメラが作動し一定時間撮影する。夜間の撮影も考慮し、後に赤外線カメラと組み合わせる。

この自動撮影装置を稜線上の要所や獣の入った痕跡のある穴などに設置した。状況と結果は「岩穴の観察」の項を参照。

《捜索行動》

■裏山—仮称—（4,200m）の捜索

裏山は、コーナボン谷の真ん中に島のように位置し、頂上は約4,200m。

この山の南東尾根にBポイントが設置されていることもあり、裏山の直接捜索は、当初からの予定であった。本来の目的地である南東稜で本格的な観察を始める前にBポイントの背後にある裏山を洗っておく必要があった。

この行動は、2チームが別ルートをとり、頂上を目指す。各ポイントから望遠レンズで、獣の動向をキャッチする態勢で始める。

8月19日の天候は晴れ、裏山の東面より、隊員2名、シェルパ1名、南面から隊員1名、シェルパ3名が行動をおこす。この裏山の東面は南東向きに開けた谷、コーナボン・コーラを上昇する温暖な気流を受けるためか雪解けも早く、まわりの山より高い地点まで樹木が生育している。密生する植物は背より高く、見通しは悪い。この中に多くの獣道がある。主にシカ、またはシープの類と思われるが、それとは別の痕跡もある。後にクマ

の姿も確認されたことから、クマの足跡と思われる。

4,000m以上は草丈も低くなり、視界もきくようになる。昼食中に近くで動物の足音がするも、姿は確認できず。昼過ぎよりガスが濃くなり、視界不良の中をBポイントを経由し16時、BCに帰着する。

8時間の搜索活動で裏山には予想以上に動物が多いことがわかった。植生も食用となるセロリに似た植物や薬草もあり、3,600m地点より下には竹も多く、これは水牛の餌として、また小屋の床のクッションともなる。そのため、動物だけでなく、放牧番の人たちも時たま登るようである。

■南東稜の搜索

調査活動は南東稜の4,600m地点に設営したCポイントのメンバーにより行われた。自動カメラのバッテリー交換のための行動とは別に、搜索を目的とした行動は稜の上部に4回、稜の末端方向には3回行った。

8月28日、南東稜末端方面を調査する。Cポイントより4,790mのピークを越し、下降気味の岩

稜を20分進んだ地点、稜線をはずれ南側、タレジャ・コーラに伸びる支尾根を60m下ったところで不可解な岩穴を発見する。4,600m地点のこの岩穴は、稜線からは見えず、偶然発見したものであるが、天然の岩穴ではないことは確かである。

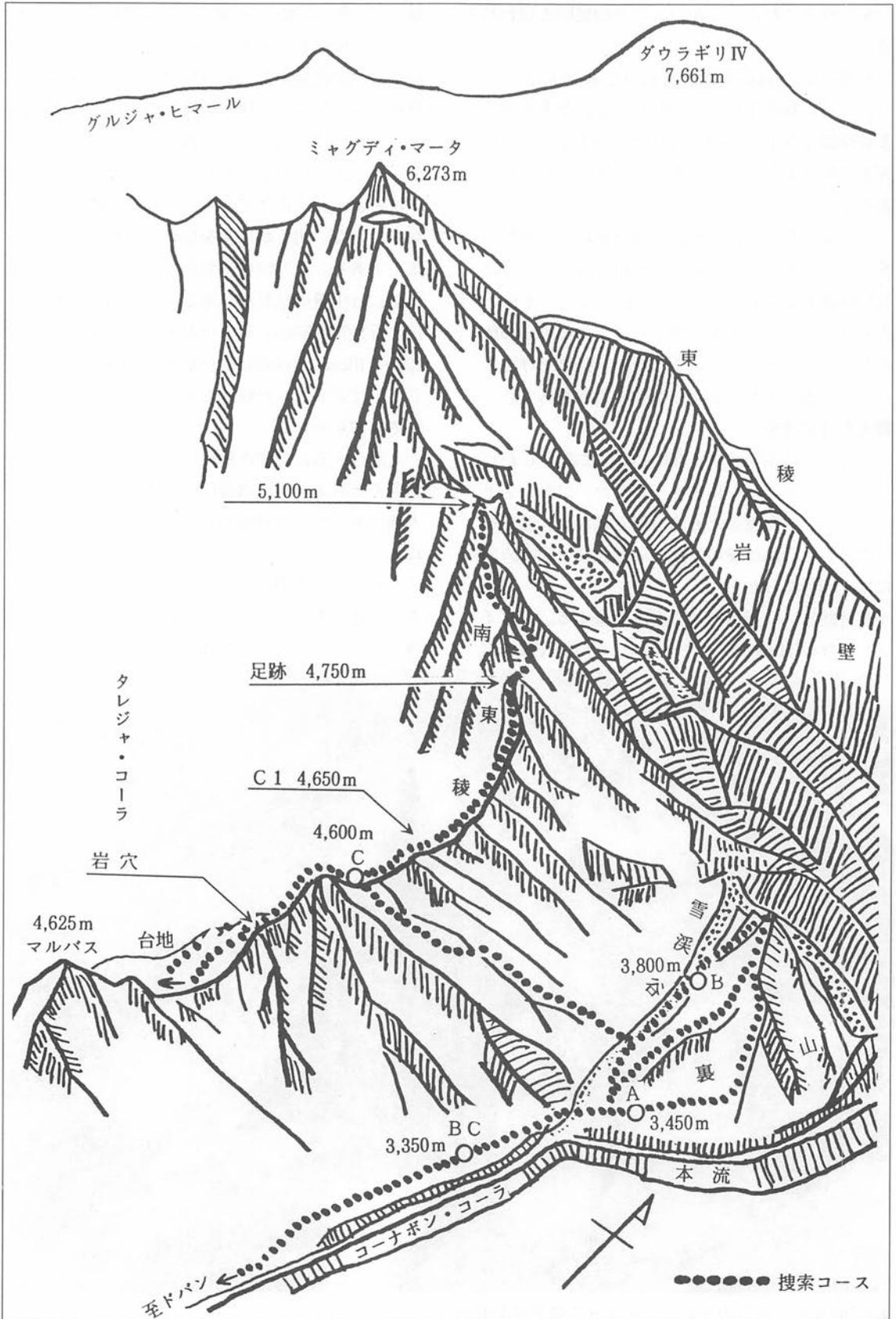
岩棚と上の岩のひさしを利用し、そこにプレート状の岩を計9枚立てかけて、雨風を防ぐようになっていた。明らかに手を使わなければならない細工である。入り口は南面向きにあり、幅50cm程、内部には少量の枯れ草がある。岩穴内部のサイズは奥行き70~80cm、高さは最大部分で80cm、横幅130~140cm、中は強い獣臭がある。何らかの獣がしばしば立ち入った痕跡であるが、毛やフンは確認できなかった。

人間が入るには少々狭い、この岩穴をどのように考えたらよいか、常識的に判断すれば、作者は人間であったが今は獣が使っているとしか考えられぬ。

人が作ったものとしても、この不毛の高所に泊まる必要があったのか、シカ猟のハンターが夜を過ごしたとしても内部が狭く、不自然であるがこ



▲4,790mピーク下のタレジャ・コーラ側支稜の岩穴



の可能性はある。

TVカメラ、ビデオ、スチールカメラで撮影し、上半身を穴に入れ、内部からも写真を撮る。翌日、この岩穴に自動カメラを設置する。

■裏山の再捜索

◇8月30日 晴れ 午後よりガス、雨

Bポイントの3名(田中、大谷、ワンゲル)は、再度、裏山の捜索を行なう。

今回は最も西側の稜を登り11時45分、頂上に至り北面を調査する。途中、イチゴが多くあり、これを食べた痕跡あり。

■南東稜再捜索

Cポイント4名(村上、古山、木野、高橋)は、南東稜末端方面を再度捜索に向かう。

先日発見した岩穴には自動カメラがセットしたままだが立ち寄らず、さらに下降を続ける。10時にはマルバス(4,625m)とのコルを見下ろす地点に至る。岩稜はここで終わり、この先は広い草原の稜となる。タレジャ・コーラ側は広大な草原の起伏が広がる。約1km眼下に無人の放牧カルカが見える。さらに南東方向約3km先、マルバスの南側台地には池が確認され、そこに続く2条の道も望見される。タレジャ側はかなり大きな放牧が行われているようだが、現在はより低所に下り、全くの無人である。

30分程観察した時、草原台地がタレジャ・コーラ源頭に落ちる地点に、動く黒点を発見する。双眼鏡で見ると眼下2km以上先のため、コゲ茶色で立って歩いている人らしきものとは確認できない。谷側から台地に登り5分後、ゆるやかな草の尾根を越して消えた。場所が場所だけに、イエティではないかと緊張する。TVカメラと300m/mの望遠で撮影。

11時30分、ガスの発生と共に今日の捜索を終わり、Cポイントに13時20分帰着。日をあらためてタレジャ・コーラに捜索チームを出すことにする。

◇9月1日

Cポイントより、村上、木野カメラマン、シェルパの3名が1泊の予定でマルバスとのコルを経由し、現場に向かう。予想外に早いタイムで無人のカルカ跡に着き、さらに10時50分には先日のヒト影が通った現場に到着した。現場は草たけ20cm

▼草原台地末端の動く黒点



～30cmの草原状尾根で、その中に新しい踏跡があり、そこに目じるしのごとく、背の高い草1本が残されていた。また、石を立てたものも残されており、これは現地の人たちが目じるしにしたものと考え、ヒト影は人間である可能性が強いと判断する。正午近くに視界不良となり、捜索活動を停止、キャンプの設営に入る。

◇9月2日

10時頃、タレジャ・コーラの捜索チームは人影の地点より50m下降した所で23～24cmのハダシの足形を確認する。したがって、先日望見したものは人間であろうという結論に達した。

■南東稜上部の捜索活動

Cポイントより上部の捜索は、これまでに2回行なったが、いずれも登山隊C1付近までである。この時は細い稜線や岩棚で骨や獣毛の混じった大きなファン(ユキヒョウのもの)を何回も回収していた。

その後しばらくは南東稜下部の捜索が続いたため、上部の本格的な調査は行っていない。

◇9月16日

Cポイントの隊員を2手に分け、村上、木野カメラマンは途中でビデオをセットした後、C1より上部に向かう。田中、高橋は下部を捜索する。

9時、村上はC1上部でカモシカ類と10mの近くで出会う。さらに登攀を続け、約4,750m地点で、人間のハダカの足型にそっくりな足跡を発見する。足跡は2個確認された。サイズは約18cm、岩稜がその部分だけたまたま砂地状となっていたため、くっきりとプリントされていた。1週間以内のもので、さらに付近を調べたが、岩稜のため

足跡が残る条件ではなく、TVカメラとスチールカメラで撮影し、下降する。

◇9月17日

昨日発見した足跡をさらにいくつか捜すため、4人で出発。途中、昨日セットしたビデオ・カメラを調べる。カメラは作動し、何かが写っているのだが、それがなんであるかは判明できない。帰路に新たにセットすることとし、問題の足跡の地点に行く。

砂地状の部分に約1.5cmの深さで踏み込まれた足型は、まさにヒトの足型である。それも人間の子供位のサイズである。ふたつとも左足のみで、右足をおいた部分は岩の上に残っていないことがわかる。土踏まずもあり、踵も猿や類人猿のようではなく、丸く人間的である。これはダブルプリントでできたものでもない。しかし、これは人間のものでもない。どのような状況から考えても、この時期に現地人がこの地点にまで来ることはない。たとえ登るにしても、Cポイントを通らなければこの地点には登ることができないのである。まして子供がハダシで登れるような稜ではない。

その日は5,100m地点まで登り、調査したが、カモシカ類の足跡のみたくさんあり、問題の足跡と同じものを発見することはできず、下降する。

《地形と環境》

《コーナボン・コーラ》

コーナボン・コーラは、7,000m以上のダウラ・ヒマール及びグルジャ・ヒマールの連山に囲まれた、コーナボン内院氷河盆を水源とし、南東方向に流れ、ドバンにてミャグディ・コーラに合流する、支流谷としては規模の大きい谷である。

コーナボンの谷は地形的に上部と下部に分けられる。上部をコーナボン内院、下部を単にコーナボン・コーラと区別して表現する。上部と下部の境界は、ミャグディ・マター（6,273m）から東に伸びる岩尾根（東稜）が堰堤となり、ほぼ完全に近い状態で谷を遮断しており、上流に典型的な内院氷河盆を形成しているのである。

内院に通じる唯一の流出溝は、細いゴルジュ帯となっており、その奥には巨大な滝がある。落口

▼ダウラギリIVをバックに捜索隊員



岩稜という地質条件もあり、2個の足跡を確認したにすぎないが、このような足跡を残す獣がいるという事実は、あらためてイエティの存在を予測すると共に、今後にも問題をも残した。

《その他》

隊員外として、TV取材の撮影チームが同行した。主にBCの周辺を取材した後、9月1日に下山したが、うち3名は隊員とともに最後まで行動を共にした。ほか、リエゾン・オフィサー1名、サダー1名、シェルパ5名、コック1名、キッチンボーイ4名。

には厚い氷河の断面を見せ、その下からは、膨大な水量を放出している。

この地形はまさに自然が造ったダムである。内院に入るには、流出溝からも堰堤の障壁を越すことも不可能であり、南東稜を登攀し、ミャグディ・マターを経由するほかにない。上部のコーナボン内院と下部のコーナボン・コーラは、景観的にも、環境的な条件も全く異なる地である。

コーナボン内院は、回りを7,000m級の峰に囲まれた、直径7km以上もある氷河盆地である。盆の最低地点の標高は4,900m～5,000mであるが、全面氷河に覆われているため、植生と言われるものはほとんどない。したがって、動物（獣）の生息は不可能と考えていた。しかし、1975年秋のカ

モンカ同人ダウラギリIV峰登山隊時には、この内院氷河上で、約25cmの人間に似た足跡を目撃している。

さらに、C5 (5,600m) では、数日間、昼夜にわたりキャンプの回りで不可解な鳴き声を聞いている。その正体を確認はできなかったが、なにかがいることは確かである。それが獣であるとなれば、どこから内院に入り込んだものか、また、なぜ餌となるものが皆無のこの地にいるのか理解できぬことである。

下部のコーナボン・コーラは、ミャグディ・コーラとの合流地であるドバン (約2,600m) から堰堤状の障壁の下までの谷間であり、今回の搜索範囲の中心でもある。

位置としては、北東側をダウラギリV峰 (7,618m) より派生する南東稜に、南西側は、グルジャ・ヒマールの尖峰、ミャグディ・マータ (6,273m) から派生する南東稜の間にあり、南東向きに開けた谷である。上流方向の北西面は、先ほどの内院を形成する障壁でふさがれている。この障壁があるために、内院氷河の流出と寒気をシャットアウトしている。反対に、下流より上昇する暖気流は、障壁の下まで充満することが多く、この時期 (モンスーン・シーズン) のコーナボン・コーラは、南方・亜熱帯気候の影響下にある。

東西に連なるダウラ・ヒマール南面は、亜熱帯気候に面した山群である。そして、高所山腹に広大な氷河盆や台地をかかえた地形は寒気と暖気の接点を生じ、不安定な気象条件となる。特に風が弱く急激に気温が上昇するプレ・モンスーンには、雷雲の発生が著しく、猛烈な雷撃を覚悟しなければならない。南面に特有なこの気象は、晴天日の少ないモンスーン期には雷雲の発生は弱く、さらにポスト・モンスーンに入るとほとんど発生しない。

コーナボン・コーラにおける降雪及び積雪状態を推測すると、雪線の上昇限界は10月上旬頃であり、例年、5,000mラインまで後退するこの時期が、残雪も最少の状況と考えられる。再び11月より降り始め、冬から春先にかけて多量の降雪があると思われる。

コーナボン・コーラが最大積雪量となる時期は

2月下旬～3月上旬と推測される。低所はどの付近まで降雪及び積雪があるかは不明である。しかし、4月上旬では、3,000m付近より雪崩による残雪が見られるだけであり、低所での降雪は急激に少なくなるようだ。これは、樹木の景観からも判断される。コーナボン・コーラも3,000m以下ではヒマラヤ南面の特徴である。夏涼しく、冬は比較的温暖な気候であり、少なくとも寒冷の地ではないと推測される。

《植 生》

以上のような地形と気候条件にあるコーナボン・コーラは、植物相も豊かである。ドバン付近の照葉樹のジャングルから落葉樹林帯、高山植物帯まで多種類の草木がある。植物に関する知識がないことと、詳しく観察もしなかったが、薬草や食用に適したものも多い。中でも、トンキン竹に似た竹の種類は、標高2,300m付近から3,400mまで分布している。量的にも豊富であり、分布域の標高差も大きいので、食用としての竹の子 (筍) は長期間にわたり採集ができる。3,000m～4,000mの間には、大型の葉の草があり、茎はセロリに似ている。少し酸味があり、放牧番たちは食用としている。

その他、モンスーン期の3,000m～4,000mラインには、木いちご類、こけもも、数種のベリー類がある。コーナボン・コーラの植生は、本流の谷であるミャグディ・コーラと比べても明らかに豊かである。

《エンゼルー裏山ー》

我々が、仮称で「裏山」と呼んでいた、コーナボン・コーラの雪渓谷に浮かぶ島といえるこの小山は、BC直下の3,300mを基部とし、頂上は約4,200mの独立した山である。監視拠点としてのBポイントは、このエンゼルの南側3,800mに設営した。コーナボン・コーラは、標高のわりに温暖な環境下にあるが、中でも、このエンゼルのその特徴がよく表れている。

4月上旬、南東稜のコーナボン側斜面は、数メートルの積雪が残っている。しかし、このエンゼルだけは明らかに雪が少ない。降雪量が同じである

とすれば、雪解けが早く進んでいるものと考えられる。これは、日当たりの良さや谷沿いに上昇する温暖な気流を正面に受けるためであろう。

この状況は、植生にも表れている。周辺の同高度の斜面の植生状態と比較すると、明らかにより高い地点まで高木類が生息している。これは、南東側斜面に限った状態であるが、3,500mまで竹がり、さらに、ヤナギ（柳）、カンバ（樺）類、ばら、ハンノキ（榛の木）、喬木ではネズ（？）の類が3,800m付近まで生息している。このネズの喬木に黒くこげた枯木が点在するが、落雷のためと思われる。

3,800m以上で樹木はジャクシン類だけとなり、他は多種類の密生した深い草の斜面が続く。4,000mを越えてようやく高山植物の景観となる。

《コーナボン・コーラの生物》

－BC（3,350m）以上で目撃した生物－

獣類では、BC以上5,000m付近までシカ（鹿）、またはカモシカの仲間（ヒマラヤカモシカと思われる）は各所で目撃した。2～3頭から大きな群れで15～16頭であった。

ヒマラヤグマ → 3,450m地点よりエンゼルに入る。

ハヌマン・ラングール → 子連れの約40頭の群れがBCの近くに現れ、BC背後の岩稜に約1時間滞在する。

ナキウサギ、オコジョまたはイタチは主に南東稜稜線が目撃するが、どこにでもいるようだ。

鳥類では、Bポイント（3,800m）で、9月10日時点で、ツバメが飛んでいる。他にワシ・タカ類、雷鳥の仲間、ユキハトの群れ、また、9月中旬からはニジキジが急に見られるようになった。BC付近では、八つ頭に似た鳥や、赤・白・黒三色の鮮やかな鳥、その他数種類の鳥を観察した。

昆虫で目立つものは、Bポイント付近で花に来る大型のハチ、同じくBポイントでオニヤンマに似た大型のトンボが9月10日時点まで確認されている。

獣や鳥のほかに、南東稜上のCポイント（4,600m）から4,700mのピーク付近では、小型のカタツムリとミミズが多くいた。また、目撃はされな

かったが、BC付近ではオオカミもいるようだし、稜線上では、ユキヒョウの生息圏としての痕跡も多く発見した。この他にもかなりの種類の生物がいると思われる。特にエンゼルの山腹には、獣道が縦横にあり、多くの動物が生息しているようだ。

以上の目撃した生物の中で、注目しなければならぬことは、約40頭のハヌマン・ラングールの群れがBC背後の岩場（3,400m）に現れたことである。このサルは、本来、樹林帯を生息場所とし、コーナボンの谷でもドバン（2,600m）周辺のジャングルではしばしば確認できるのであるが、小灌木がわずかにあるだけのBCに子連れの大群で来るとは意外であった。ハヌマン・ラングールの中には亜高山帯にまで進出するヒマラヤ・ラングールという亜種がいるらしいが、これがその類と考えられる。我々にとっての問題は、このサルが3,400mに出没した事実である。無雪のモンスーン期であれば、場合によっては4,000m程度までは餌を求めて登る可能性もあると考えなければならない。このような可能性を考慮した上で、過去、コーナボンの谷において4,000m以下で目撃されたイエティらしき獣とは、ラングールを誤認したとも考えられることである。しかし、普通であれば、黒い顔と白い体の鮮やかなコントラストのラングールであり、よもや誤認するとは思われぬが、距離や気象条件等の状況によっては、皆無とは言えないのである。

《コーナボン・コーラの人為的な変化》

今回、約20年ぶりでコーナボン谷に入った。当時と比べ、どのような環境変化が生じているのか、主に放牧作業、狩猟、登山等の人間の活動による環境変化である。

結論からいえば、全く変わっていない。少なくとも表面的には自然破壊が進行しているとは見えない。これは地形的な制約が、人間の進出を拒んでいるためと思われる。ボガラ集落以奥の道は以前に比べ悪路と化し、移送中に家畜の事故が多発している。夏期だけの少数の放牧者では手に余る工事であり、現状維持が限界のようである。

コーナボンの放牧地は、小規模なものが6地点ある。しかし、これを同時期に使うことはない。

草の成育時期に合わせて、順次、より高地の放牧地に移動するための通過拠点としての放牧地である。

今回我々がBCに到着した8月13日時点では、途中の放牧地は無人でありこの谷の放牧地としては最高所(3,450m)に全部集結していた。2家族、5～6人の親子が子牛を含め、25～26頭の水牛を管理していた。さらに今年は、近くに少数のヤギ(山羊)の放牧も行なわれていた。これがコーナボン・コーラにおける放牧の規模である。彼等は8月24日を最後に、この地を離れ、再び低所の放牧地へと下山を始めた。

狩猟については南東稜における猟と同様で、もはやその価値は失われたと思われる。まれには個人的な鹿猟はあると思うが、換金目的とした猟は行われていないようだ。今回も銃を持った者を見かけなかった。むしろ猟よりも換金目的として薬草を採りに放牧地からエンゼルの山腹に登るようだ。

1975年を最後に、この谷に入った登山隊はいない。その後、コーナボン・コーラに入った者は、イエティ捜索の鈴木氏が1988年まで継続的に訪れた程度である。毎年、大部隊の登山隊が押しかけた1970年代と比較すれば、訪れる人間も少なく、踏み跡も不明瞭となるわけである。コーナボン・コーラは行き止まりの谷であり、そのうえに一般のトレッキング・パーミッションでは入山禁止区域となっている。特別な目的を持ったもの以外は入ることもなく、結果として自然環境が保たれている興味ある谷といえる。

《南東稜の状況》

南東稜は、グルジャ・ヒマール東端のピーク、ミャグディ・マータ(6,273m)から派生し、北東側のコーナボン・コーラおよびミャグディ・コーラと南西側のタレジャ・コーラおよびドラ・コーラを分かち稜である。その末端はムリ村の眼下、両コーラの合流地点、標高1,300mで終わる。

この稜は5,100m地点まで、稜線全体の傾斜はゆるやかである。反面、左右の側壁は急峻である。

今回、イエティ捜索の監視拠点とし、左右の谷も視野に入れることが出来る稜線上、4,600m地

点にCポイントを設置した。

Cポイントでの観察および捜索活動の範囲は、最高所で5,100m地点まで、稜の末端方向には、マルバス(4,625m)のコルを經由し、タレジャ・コーラに下降、台地上約4,000m付近まで及ぶ。

モンスーン期間でもあり、不安定な気象条件であったが、8月16日～9月23日まで観察を続ける。

南東稜の植生は、4,900m付近まで数種の植物が見られるが、それ以上ではコケ類だけとなる。これは、稜線上が岩稜、左右の斜面も岩場が多く、地形的に植物が根付く条件にないことによる。今年の南東稜は無雪状態であり、実質的にこれが南東稜における植生の上限と考えられる。稜線の左右の斜面では、北東側のコーナボン側に緑が濃い。タレジャ側は、崩壊状態の斜面が多く、地形的、地質的な制約もあるが、同じような地形の斜面であっても南西側斜面は植物の種類も量も少ない。これは、斜面の方向性による環境条件のためと思われる。

《南東稜の生物》

Cポイント(4,600m)を拠点とし、南東稜上部、および末端方面に各4～5回の調査・捜索を行なった。その結果、直接目撃した鳥獣や糞、足跡等の痕跡から判断し、稜線周辺は予想以上に多くの動物が生活の場としていることがわかる。

この時期(8月16日以後)、大型の動物は、Cポイントより上部に多く目撃され、末端方面での目撃例は少なく、発見した糞や足跡も比較的古いものであった。この現象をどのように判断するか。雪線の上昇と共に活動拠点を高所に移動したとみることできるが、Cポイント建設当初には、夜中にテントのわきを通る足音がしたり、近くでカモシカの群れも見ていることから、我々の存在を敬遠し、より上部に向かわせた可能性もある。

目撃した動物は、ヒマラヤ・カモシカが多い。これは大型で目立ち、各所で群れを見るが稜線近くに特に多く、稜に沿ってははっきりとした踏み跡が残っている。その他では、ナキウサギ、オコジョの類。鳥類は雷鳥の仲間が群れて歩き回る。それまで確認できなかったニジキジ(ダフエ)も9月中旬から急に姿を見せはじめた。

4,600mのCポイントおよび南側の4,790mのピークは、1年の大半が雪に覆われているが、ここにもミミズと小型のカタツムリがたくさんいた（カタツムリはすべて空であった）。リッジ部分や岩のテラスには、毛、骨の破片、カモシカの蹄、キジの羽毛等が含まれた糞が残されている。また、ナキウサギの穴を掘り返した所もあり、大きなネコ類の足跡も観察した。場所的に雪豹と思われる。

さらに、4,750m地点では、人間の裸足に似た未知の足跡も発見しており、この他にも確認されぬ動物は多くいると思われる。

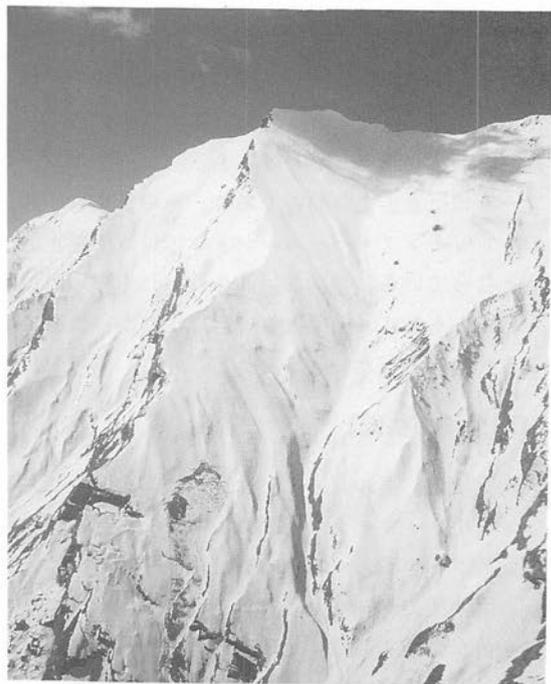
今回の捜索は、ルート工作をせずに登れる最高地点5,100mまで調査を行なった。そこは少しくぼ地となっており、残雪がある。この残雪上には足跡は残っていないが、20~30m下まではカモシカと思われる踏跡が続いていた。そこには自然の岩穴がある。奥行きもあり、奥が低くなった内部は、10人程度入ることができる。足跡はこの中に続いていた。岩穴の入り口近くには天窓状の抜け穴があり、稜の北側への通路となっているようだ。獣は砂岩質の岩を踏み台として天窓を通り抜けるらしく、下の砂岩はこすれた跡が明瞭に残っている。例年ならば、この地点が雪線上限のラインであり、草といえるものはなく、この稜における大型草食獣の生活範囲としても上限ではないだろうか。余談ではあるが、この地点こそ、1971年の雪深い春、直立した未知の獣と間近で対峙した事件の現場なのである。

《南東稜と狩猟》

ボガラ村あたりの住民が猟のためにCポイント付近まで登っていたことは確かである。近くで古い薬キョウが落ちていたし、岩陰には岩で囲った待ちぶせ場所と思われる跡も残っている。8月27日に発見し、自動カメラをセットした岩穴も同様の目的で作った可能性が高い。南東稜の自然条件から、村人が稜線上まで登れる期間は、夏の限られた間ではあるが、猟のために最奥の放牧地から1,200m以上の高度差を登り、稜線に達していたことは事実である。しかし、それはかなり以前のことと思われる。おそらく最近では、猟のために稜線まで登ることは少ないと推測される。Cポイ

ント近くの待ちぶせ場所と思われるものは、永いこと使われた様子もなく、また、自動カメラを設置した岩穴は、獣が住みついているような状態である。その理由・原因は国際野性動物保護ワシントン条約の施行により、毛皮類の売買が禁止された結果と無関係ではあるまい。

1971年当時、カトマンズの土産店には、たくさんの野性獣の毛皮が売られていた。72年にはダウラギリIV峰に入った群馬岳連隊は、ボガラ村で2頭の雪豹の皮を入手している等、そのころの猟は、換金目的のための性格を持つものであり、獲物として価値のあるジャコウ鹿や雪豹を狙い、奥地・高所まで入った。その後、保護条例が浸透した結果、もはや猟により、収入を得ることができなくなった。現在も食用としての鹿猟等は行われていると思うが、片手間的なものと考えられる。狩猟の性質・目的が変わったと判断している。したがって、最近では猟による環境変化は以前よりはるかに少ないと思われる。



▲春、3月の4,790mピーク

地域ニュース

《ネパール》

続出した空の事故

1998年8月から今年1月のわずか5ヶ月の間に、ネパールで4件の航空機事故が起きている。

8月21日、乗客15人乗員3人のポカラ発ジョムソン行きの国内定期便（ツイン・オッター 9N-ACC）が消息不明となった。翌日タトバニの11km東方カルバラヒ丘陵で発見されたが、生存者はいなかった。パイロットはネパールの有名な歌手タラ・デヴィの夫君S.B.シュレスターだった。事故調査委員会によると、雲の中に入ったため気象状況を確認しようとあわてて進路変更、気象状況に応じて自動制御されていた機体は進路を誤り、急峻な斜面に追突した模様。重量超過もなく、天候は良好だった。墜落場所はヘリコプターが着陸できる場所ではなく、遺体収容のためにチュチュ・カルカに臨時のヘリポートを造成した。

10月24日、ジリ付近で死亡したベルギー人トレッカーを収容するためルクラを離陸した9n-ACY型ヘリコプターが、離陸直後管制塔との交信を絶った。26日、村人がアンデリ川のバイサケで同機の残骸を発見したが、生存者はいなかった。同機にはパイロットの他にネパール人2人が同上しており、一人はイエティ・エアウェイ創設者のアン・テンジン・シェルパ。

11月19日、カトマンズ発シャンボチェ行きの9n-ABK型ピラタス・ポーター機がクワンデ近くのバグディンに墜落。同機は輸送機で、搭乗者はアン・ギャルツェン・シェルパ唯一人だった。

今年1月17日、カトマンズ発ネパールガンジ行きの8人乗りセスナ・キャラヴァン（9n-ADA）がジュムラで離陸に失敗して炎上、乗客4人とパイロットが死亡、5人が重傷、2人が軽傷を負った。同機には乗客12人と乗員2人が搭乗しており、明らかに重量超過だった。

1975年以来、ネパールでの航空機事故は、実に25件にのぼっている。（ヒマヴァンダ）

《インド》

U・P州で大地震

3月29日午前零時35分（日本時間同4時5分）ごろ、ウッタル・プラデシュ州でマグニチュード（M）6.8の強い地震があり、チャモリ地区では58人、ルドゥラプラヤグ地区では27人の死亡が確認されている。死者の数は百人を超えるものと思われる。同日朝までに余震が6回続いており、更に犠牲者が増える可能性がある。

インド気象当局によると、震源地はヒマラヤ山系にあるチャモリ地区一帯で、強い揺れは40秒以上も続いた。地震の揺れは約300km離れた首都ニューデリーでも感じられ、壁に亀裂の入ったビルもあり、多くの住民が通りに飛び出した。

ウッタル・プラデシュ州では、1991年にも大地震のためウッタルカシで1600人も犠牲者を出しているが、ラクノウの役所関係者によれば、ウッタルカシの建築物の屋根は石やセメントが多く、犠牲者の多くは崩れた屋根や建物の下敷きになった。チャモリやルドゥラプラヤグ地区の建物の屋根はトタンや草、木など軽いものが主となっているので、倒壊した建物や屋根の下敷きになった犠牲者の数は、ウッタルカシほど増えなかったのではないかとのこと。（3.29 CNN Interactive）

《ブータン》

タクツァン寺の再建計画

仏教国ブータンで最も神聖とされながら昨年4月に火災で焼け落ちたタクツァン寺院の再建計画が、日本を含む諸外国の協力で進められている。

8世紀に開かれたとされるタクツァン寺院は、「トラの隠れ家」の異名もあり、チベットからトラの背中に乗ってやってきた高僧が数か月めい想にふけたという伝説がある。

寺院はパロ空港に近い標高2,950mの険しいがけの中腹にある。昨年4月19日に収蔵品を狙った強盗に押し入れられ、僧1人が殺害されたほか、放火とみられる火災で、石と木を組み合わせた建物

13棟のうち主要部分が消失した。

再建に必要とされる金額は、250万ルピー（約800万円）。火災が報じられた直後から、イタリアなど西欧諸国より続々と義援金が届き、再建費用はまかなえそうだ。また、同地で歴史遺産の改修工事に携っていた日本の青年海外協力隊がブータン内相の委嘱で再建に向けた設計図の作成などを進めている。だが作業は予想以上に困難だ。建物の図面が残っておらず、焼け跡の木片などから寸法を割り出す必要がある。現物と同じ建材を探し出すのも大変だ。加えて、ふもとから徒歩で3時間半もかかる現場に材料を運び上げるのが一苦労。だが、計画に携わる協力隊員の久保賢作さん（29）は、「作業に時間がかかるのは、先方が寺院を可能な限り忠実に再建しようとしているから。伝統建築や文化を決して捨てない彼らの生き方には学ばされることが多い」と、ブータン側との共同作業に意欲を燃やしている。

（1999.3.30 読売新聞から）

トピックス

13才の少年がコンデ・リ峰へ挑戦

4月13日に13才の誕生日を迎える東京杉並区在住の庄田さとる君が父親の一信さん（43）らと、ネパール・ヒマラヤのコンデ・リ（クワンデ・6,187m）に挑戦するためネパール入りした。

さとる君は、5才の頃から父親と登山を始め、小学校2年生で谷川岳一の倉沢島帽子奥壁、4年生で衝立岩正面壁、5年生でモンブランのコスミック山稜などを登っている。

今回は3人の隊で順調にいけば5月上旬に登頂の予定。

八千メートル峰最高齢登頂者

ベネズエラ人でエヴェレスト最高齢登頂記録保持者（1993年10月7日登頂。60才と160日）のラモン・ブランコ・スワレスは、1998年7月9日にガッシャーブルムⅡ（8,035m）の登頂に成功した。彼はこの日で65才と70日であり、八千メートル峰最高齢登頂記録保持者となった。ちなみに日

本人のエヴェレスト最高齢登頂記録保持者は、川原慶紀の57才と182日（1998年5月20日登頂）。八千メートル峰最高齢登頂記録保持者は、石川富康の61才と242日（1998年7月22日 ガッシャーブルムⅡ）となっている。

BOOKS

遥かなり 曲阿加吉瑪

1997年夏、新潟県山岳協会と中国の合同登山隊が、青海省南部、メコン川源流部であるザチュウ（扎曲）支流の源頭近くに聳えたつチアジャジマ（5,930m）に登山した報告書。この山は岩塊状をしており登山隊はそのⅡ峰（5,890m）の初登頂に成功した。初めて紹介される山であり、地域的にも新鮮な場所である。青海省南部とチベット自治区北部は、長江、メコン、サルウインの源流部となっており、氷河を抱える山は少ないものの、六千メートル級の山々もあって、今後注目される地域であり、貴重な資料となるだろう。（山森）

B5判 84頁 カラー8頁 平成11年1月刊
〒940-0041 長岡市学校町3-11-7 藤井信

ヒマラヤ酔夢譚

著者は、労山前会長の森田千里さん。本の帯には「子どもたちに本物の自然体験を！と、南海の無人島でサバイバル生活をさせたり、番長くんをヒマラヤの氷河に連れ出したりしていた「はみだし教師」、冗談がホントになって、定年を前にインドヒマラヤの山中に山小屋を作り、移り住むことになった。さて、そこでは何が待ち受けていたのか……ロマンあふれる痛快・傑作なヒューマン・ドキュメント！」とある。ユニークな人材の多い労山の中にあっても随一と目される著者であるが、期待を裏切らない肩の凝らない好著。インドヒマラヤ・トレッキングガイドも盛り込まれている。

（山森）

B6判 221頁 カラー8頁 1999年3月16日刊
リベルタ出版 1900+税

RATNACHULI

1996年に信州大学とネパール警察合同隊が初登頂した、ラトナチュリ峰（7,035m）の登山報告書。

ネパール中部、中国との国境にあるラトナチュリは、技術的な困難はないものの、ネパールでは残された数少ない未知の地域であった。このような地域の許可取得には苦労はつきものであり、帰路キャラバンのトラブルも遠征では、常にありうることであり、それらをそつなくこなせたメンバーによって、登山は成功裏に終わった。1993年アンナプルナII偵察報告、94年ギャジカン登山報告もある。（山森）

B5判 187頁（内カラー8頁）1999年3月刊
〒399-0045 上伊那郡南箕輪村8304
信州大学農学部森林科学砂防工学研究室気付

WANDERING
KATHMANDU

著名な建築家であり昨年10月に急逝した宮脇檀氏を中心とする建築家グループが、自分たちの足で歩き、スケッチをし、聞いたデータをもとに、カトマンズの建築と都市を分析した本。執筆者は建築・都市のプロたちなので、一般の旅行ガイド以上の深い分析をしている。写真や地図も豊富に取り入れているので、一般の人にも十分楽しめる。尚、今後同様の本として「ブータン」も発刊の予定がある。（居川）

A5変形判 240頁 ほとんどカラー
1999年4月刊 建築知識 1800円+税

東京集会のお知らせ

日時 5月31日（月）午後7時～
内容 中国とパキスタンの話題
場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内
本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。
お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る
2月号	再発見・八ヶ岳 森の逍遙から氷瀑まで
★ 3月号	魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
4月号	残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
★ 5月号	新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
6月号	南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
★ 7月号	花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
8月号	幽遠の黒部渓谷、岩壁、源流、高原へ
9月号	森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
★ 10月号	南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
11月号	秋深い奥秩父と西上州 その山と人
12月号	岩と雪の殿堂・剱岳と立山連峰へ

（★は特大号・800円となります）

東京新聞出版局（中日新聞） 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
（東京本社） 全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

カラコルム 1998

中川 裕

英国の山岳雑誌「Mountain」が廃刊となって10年になろうとしている。それほどボリュームがある雑誌では無かったが、世界中の情報が豊富で、掲載されている写真はめずらしい角度や未知の山域の写真が多く、登山を計画するのに参考になるものが選ばれており、編集者の目の確かな雑誌だった。現在イギリスの最大の山岳雑誌は「High Mountain Sports」で、英国登山評議会（BMC）の機関紙の役目を果たしている。英国の伝統を引き継ぎ、世界中の情報が多く掲載されている。その後、日本でも「岩と雪」が無くなり、推薦状制度とカトマンズ在住のE・ホーリーのおかげで、ネパールとチベット側のエベレストとチョ・オユーに関する情報はある程度整理できているが、チベット以外の中国やカラコルムの外国隊の情報はほとんどわからなくなってしまった。「High Mountain Sports No196」の記事を参考にして、日本隊以外の昨年のカラコルムについてまとめてみた。

K 2 (8,611m) 昨年は天候にも恵まれなかったせいか、世界第2の高峰K 2 (8,611m)の頂に立ったものは中国側も含めていない。パキスタン側4隊、中国側2隊のうち、アブルッチ稜を7,900mまで登ったイタリア隊が最高到達点のようだ。尚、ポーランドのアンジェイ・ザヴァダがK 2の冬季登頂を中国側北稜から試みる予定となっている。冬にアギール峠が越せるのか？情報が待たれる。

ガッシャーブルム I 峰 (8,068m) 7月9日にデンマーク隊の3名が登頂。翌日にはドイツ隊から1名。29日に兵庫隊の岩下頼人が登頂。31日にはスペイン人のアントニオ兄弟が登頂した。全7隊、みな北面ジャパニーズ・クローワールルートから頂を目指した。

ラモン・ブランコ65歳でG II 登頂。

ガッシャーブルム II 峰 (8,035m)

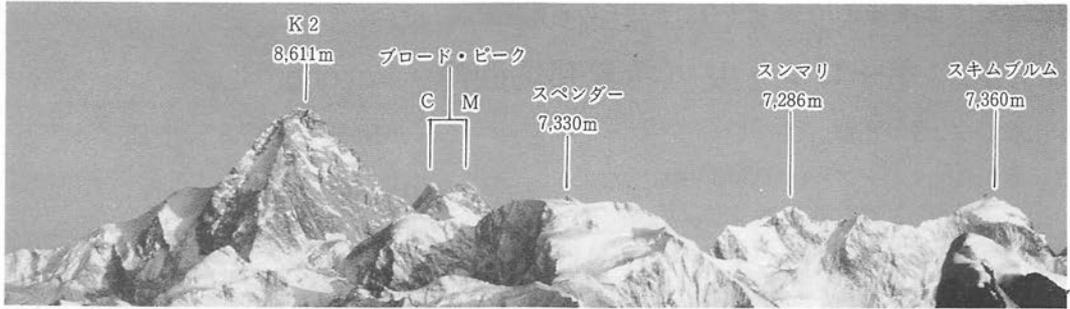
G I に比較して容易とされているこの山の登頂者数はおよそ50名、全て南西稜からだ。7月9日には15人が登頂。その中で1993年にエヴェレスト

の最高齢登頂記録(60歳 160日)を記録したベネズエラ人のラモン・ブランコが65歳70日で登頂。8千m峰最高齢登頂を記録した。ちなみにブロード・ピークには1991年58歳で登頂している。また7月22日には16人が登頂。日本のシルバートートル隊のハイポーターとして登頂したラジャブ・シャー(47)は、パキスタン人として初めて自国の8千峰5座(K 2、G I、G II、ブロード・ピーク、ナンガ・パルバット)全ての登頂者となった。ナジール・ザビルはナンガ・パルバットに登頂していない。31日にアタックしたアメリカ人のカール・ガーデスは頂上の300m手前で自分が肺水腫にかかっていることに気づいて下降。8月4日BCに辿り着き、そこからスカルドにヘリコプターで運ばれた。彼はC 3、C 4でガモフ・バックを使って時間を稼いだ。8月12日にも少なくとも5名が登頂した。

秋には中国側にアメリカ人のダニエル・マズール率いる10人の国際隊が入山した。一行はBCを4,650mに建設。9月11日には氷壁に700mロープを固定。13日にC 1 (5,760m)を建設。チベット高原から吹き付ける強風に悩まされ10月3日6,400mを最後に断念した。10月1日にはマダム・バタフライ(6,061m)に初登頂。2日には6,850mの未踏峰の東面を登っていた2名が雪崩に遭い、1名が負傷した。

ガッシャーブルム VI 峰 (7,004m) は1985年イタリア人女性が単独で初登頂したとされているが、これには大きな疑問が投げかけられている。7月26日「初登頂」をねらって南西壁を登山していた2名が雪崩に遭い1名が死亡した。

ブロード・ピーク (8,051m) スイス隊のカール・コブラー隊長等3名は7月6日に登頂。K 2の許可もとっていたアイルランド隊のエディ・クーパー(37)とスイス隊の1名は前衛峰に登頂。8月12日に登頂したアントニオ兄弟は、G IIを7月7日に、G Iには31日に登頂しており、カラコルム・ハットトリックを達成した、が多くの見方は



ブロード・ピークは前衛峰までだと考えている。兄弟はバキスタンにある全ての8千m峰の許可を得ていたが、K2とナンガ・パルバットには手も触れずに帰った。昨シーズンは7名が登頂したが多くが前衛峰までしか登っていないようだ。

E・エスコフィエ行方不明 E・エスコフィエが行方不明となった事はすでに伝えた。7月16日にBC入りしたバスカル・ベシュレーズ、エリック・エスコフィエ(37)、フランコイス・ラッサレ(女)のフランス人3人は、7月28日ビバーク装備も持たずにアタックを続行したが、ラッサレは7,700mで下降する。2名は7,800mのコルに雪穴を掘ってビバーク。翌日C3(7,300m)からアタックに出たプストルニク(47)とポワルスキーの強力なポーランドペアが、強風の中、ロープを結び合ってゆっくりと登る二人を目撃したのが最後となった。ポーランドペアも強風のためにコルの手前で引き返す。ラッサレはC2にあった寝袋とストーブ、食料を持ってC3に戻ったが、30日二人のフランス人の姿はどこにも無かった。

エスコフィエは1984年、アルプスのフー南壁のフリー初登攀。同年ドリュのアメリカン・ダイレクトとグランド・ジョラスのウォーカー側稜を一日。翌年にはウォーカー側稜とクロ側稜を同じ日に、頂上からハング・グライダーを使って継続登攀する。そして1985年のG I、G II、K2の連続登頂で一躍有名になった。翌年冬はクリストフィ・プロフィとの3大北壁の継続の競争で話題となった。彼は登山界のプリンスであった。1987年に交通事故で瀕死の重傷を負う。その後登山に復帰した彼は、技術的な困難性を追う登山は行わなくなったようだ。彼は西暦2000年に7大陸最高峰と全ての8千m峰登頂を、フランス人の山、人類初の8千m峰アンナプルナで終了するため、1996年にマッ

キンリー、97年アコンカグア、キリマンジェロ、エルブルーズ、チョ・オユーに登っていた。

ナンガ・パルバット(8,126m)には西壁から8隊が挑み、6隊13名が登頂に成功した。7月21日には韓国隊の3名が登頂。その中の1人、パク・ヤンセク(35)は10座目の8千m峰を手に入れた。

スンマリ(7,263m) 1997年、神奈川ヒマラヤンクラブの7人の命を奪ったK2の西、スキル・ブルムの北東にある、別名サボイア・カンリへの挑戦が失敗に終わった。K2にあまりにも近いのか、この山が未踏だと言う事に気づかない人も多いかもしれない。昨年は英国の7名の登山隊がアルパインスタイルでの初登頂をねらったが、南東壁から4名が7千mに達したところで、深く、不安定な積雪のために断念した。

ラトックⅢ峰(6,949m) マカルー(8,463m)やダウラギリⅠ峰(8,167m)の女性初登頂等で知られる、アメリカ人のキティ・カルホーン(37)とパタゴニアなどの登攀で有名なジェイ・スミス(47)等4名のチームが西壁を目指したが、7月25日に6,050mで断念した。カプセル・スタイルで5.10a/A2の登攀だったが、食料が不足してしまった。

米国冒険家殺害される 昨年の遭難はGⅠの郡山労山の4名とブロード・ピークでエスコフィエ等2名が行方不明となり、ナンガ・パルバットで日本人が1名死亡した。またGⅥでは2名が雪崩行方に巻き込まれ1名が行方不明となっている。ゴンドコロ峠ではポーター2名とトレッカー1人が雪崩の犠牲になっている。もうひとつ、ハラモシュ氷河の上でアメリカの著名なスキー冒険家エドワード・ジレットとスージー・パターソン夫婦が二人の村人にテントを襲われ、夫が死亡し妻も背中にけがをした。物騒な事件である。

9-13 ポーロン・リ (希夏邦瑪西峰・Porong Ri)

* 山脈：ランタン山群。

昭和58年5月刊

* 位置：シシャパンマの西北西約7 km。

[28° 3' N, 85° 7' E]

* アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342 m)を経てシシャパンマ大本営までは、車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からシシャパンマ大本営までは、車で2日間の行程。しかしシシャパンマ大本営の高度が5,000mあるので途中で高所順応訓練が必要である。大分隊はここをBCとした。

* ルートの所要日数：1982年大分隊は、4月15日にBCを建設し、7つのキャンプを出して、北面から5月17日2名が初登頂に成功したが、帰路1名が滑落死亡した。

* 山の概念：東のダショ・プー側は岩壁帯となっている。西南西約1 kmに7,013m峰、西の氷河を挟んだ北1.7kmに6,699m峰がある。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：南側からはポーロン・リと呼ばれているが、中国の地図では「希夏邦瑪西峰」と表記されている。

* 小史：1982年大分隊が初挑戦。

* 参考文献：[Der Bergmorgen 3号 故 和田実君追悼 Porong Ri 報告 (大分RCC)]

登山の概要

主峰 (7,292m)

1982年

4月～5月 北面 大分県山岳連盟隊

4月15日5,000m地点にBC建設。C1、DCを出し26日5,850m地点にC2建設。29日にC3を6,200m地点に建設。C3を出し、6日6,700m地点にC4建設。8日C5を6,900m地点に建設し、9日4名がアタックしたが東峰(7,280m)で強風のため断念。17日に江藤、和田の2名がC4から初登頂に成功。しかし、下山中、C4上部で和田が滑落行方不明となった。

[隊長：伊東亨(52) 梅木秀徳(48) 木辺正夫(50) 大力傳(46) 佐藤浩幸(44) 江藤幸夫(38) 和田実(32) 周藤譲(31) 高本可道(31) 仲井雄二(27) 安東桂三(26) 高橋芳幸(23) 井上京子(23) 佐藤雅司(54)]

[ポーロン・リ登頂(梅木秀徳)「山岳第78年」日本山岳会 1983年12月刊]

9-14 リスム (富曲・Fuqu)

* 山脈：ランタン山群。

* 位置：シシャパンマの西北西約6 km。

[° ' N, ° ' E]

* アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342 m)を経てシシャパンマ大本営までは、車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からシシャパンマ大本営までは、車で2日間の行程。しかしシシャパンマ大本営の高度が5,000mあるので途中で高所順応訓練が必要である。ここからBC(5,600m)まで1日の行程。

* ルートの所要日数：1997年労山隊は、4月29日にBCを建設し、2つのキャンプを出して、

北東稜から5月10日4名が初登頂に成功。

* 山の概念：シシャパンマとランタン・リを結ぶ稜線上にある。ランタン・リの東南東約3.8 km。ポーロン・リの南約1.8 kmにある。南面は障壁となって切れ落ちているが、北面は比較的なだらかで非対象となっている。南西から南にランタン氷河の左岸の山々につながり、北西にカンペンチンを主峰とするベグ・ヒマールとつながっている。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：「リ」は山。「スム」は3つの意と云われる。中国の地図では「富曲 Fuqu」と表記されている。

- * 小史：1997年労山隊が初挑戦。
- * 参考文献：[未踏峰「発見・消失・再発見の顛末」(近藤和美)「登山時報No.266号」1997年4月号]

登山の概要

主峰 (7,050m)

1997年

4月～5月 北東稜 労山隊

4月29日5,600m地点にBC建設。5月5日5,800m地点にC1建設。8日プラト-6,4

00m地点にC2建設。10日近藤、上野、三上とシェルパのミンマが初登頂に成功。翌11日二度目となる近藤と蒔苗も登頂した。

[隊長：近藤和美(55) 上野幸人(43) 蒔苗政議(55) 田崎弘(55) 藤川豊治(50) 吉田雅郭(41) 三上誠(21)]

[リズム峰初登頂(第13回労山実践高所登山学校) リズム峰の苦しい勝利(近藤和美)登山時報No.270号&271号] 1997年8月号&9月号 ささやかな初登頂(近藤和美)「岳人602号」1997年8月号]

9-15 ランタン・リ (南當里・Langtang Ri)

- * 山脈：ランタン・ヒマール山群。
- * 位置：シシャパンマの南南西約10km。
[28° 4' N, 85° 7' E]
- * アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342m)を経てシシャパンマ大本営まで車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からは、車で2日間の行程。
- * ルートの所要日数：1981年の偵察のみ。
- * 山の概念：南西と北西、東北東に尾根が伸び、東北東稜上に7,050m峰がある。東～南面はランタン谷、北はダチュー氷河、西はブル氷河に囲まれている。中国との国境上にある。
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：南のランタンに由来。

- * 小史：1981年京都隊が偵察。
- * 参考文献：[ヒマラヤへの道(今西錦司編)中央公論社 昭和63年5月刊]

登山の概要

主峰 (7,205m)

1981年

9月～10月 北面 AACK隊

北面5,000mにBCを建設し、タチュー氷河に入り、5,600mまで試登した。

[隊長：横山宏太郎(34) 牛田一成(26) 中川潔(23)]

[チベット高原学術登山隊概要報告書(京都大学学士山岳会)]

9-16 カンペンチン (康波欽・Kangboqen)

- * 山脈：ペクー・ヒマール山群の最高峰。
- * 位置：シシャパンマの北西約31.8km。ヤンラ・カンリの北東約44.7km。
[28° 5' N, 85° 5' E]
- * アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342m)を経てシシャパンマ北山麓を経てBCまで車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からは、車で2日間の行程でBC(4,650m)。
- * ルートの所要日数：1998年愛媛隊は、8月12日にBCを建設し、3つのキャンプを出して、東面から30日2名が登頂に成功し、北北西

にあるカンブー峰に3名が初登頂した。

- * 山の概念：主峰の北北西1kmにカンブーと名のある7,230m峰があり北側は岩壁である。
- * 通常の登山時期：春と秋(愛媛隊は夏に登山)
- * 山名：チベット語で「大きな山」の意。
- * 小史：1982年京都隊が初登頂。
- * 参考文献：[チベット高原学術登山隊概要報告書(京都大学学士山岳会)]

登山の概要

主峰 (7,281m)

1982年

4月～5月 東面 AACK隊

3月27日4,650m地点にBC建設。4月4日5,700m地点にABC、10日C1を6,200m地点に建設。東面の広い氷河に入り、15日6,700m地点にC2を出し、17日7,100m地点にデポ地をつくり20日8名がアタックしたが、天候悪化で敗退。21日森本、松林、牛田、幸島、森戸、中川、人見、近藤(裕)の8名が初登頂に成功した。22日にも上尾、西山と2度目の森本が登頂した。

[隊長：近藤良夫(57) 上尾庄一郎(43) 西山孝(40) 森本陸世(33) 松林公蔵(31) 牛田一成(27) 幸島司郎(26) 森戸陸男(25) 中川潔(24) 人見五郎(26) 近藤裕司(24) 斎藤清明(36)]

[カンペンチン(森本陸世) 「山岳第78年」 日本山岳会 1983年12月刊 チベット旅情 (カンペンチン初登頂) 斎藤清明 芙蓉書房 昭和58年7月刊]

1998年

8月～9月 東面 愛媛大学隊

8月12日4,650m地点にBC建設。17日ABCを5,600m地点、25日C1を6,200m地点、29日にC2を6,700m地点に建設した。30日森岡と平岩の2名が主峰に登頂。31日にはカンブー峰に森岡、宮前、平岩が初登頂し、同峰には、9月1日に小林、巴も登頂した。

[隊長：山本武(57) 森岡郁雄(33) 宮前哲治(29) 小林正治(28) 巴英雄(24) 平岩剛(22)]

9-17 ヤンラ・カンリ (央然崗日・Yangra Kangri)

* 山脈：ガネッシュ・ヒマール山群の最高峰。

* 位置：シシャバンマの西約64km。

[28° 23' 30" N, 85° 07' 38" E]

* アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342m)を経てシシャバンマ北山麓を経てベク・ツォの南を通りマ・ラ(5,234m)を越えて、ジーロン県を経て北面BCのルカ(3,100m)まで車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からも、車で3日間の行程である。南面はさらにジーロン鎮まで車で入り、ここから徒歩3日間でサンジュン氷河に到着する。

* ルートの所要日数：中国側からは未踏である。試登すらされていない。

* 山の概念：ガネッシュ・ヒマール山群の主峰。北、南西、東に長い尾根が派生している。主峰(7,429m)の東に伸びる稜線上に(約5.8km)にプヨン(6,676m)がある。南約6.3kmには、かつてネパール側でラプサン・カルポと呼ばれた、サラスゴ(7,052m)があり、南南東約7.6kmには、ガネッシュV峰と呼ばれているサラスゴ・カンリ(6,816m)がある。また、北に伸びるネパールとの国境稜線上の北北東約12kmには、6,668mの鋭峰ランプー・カンリがあり、北西約

25.4kmにスリンギ・ヒマールの主峰チャマール(7,111m)がある。南南西約6.8kmにパベルと呼ばれるガネッシュIVがある。

* 通常の登山時期：秋(北側から接近する場合は、マ・ラの積雪の状態によっては、春の登山に大きな影響が出るため)

* 山名：不明。

* 小史：ネパール側から1955年秋に初登頂されたが、北面からは、1998年秋H A J隊が偵察のために入山したのが初めて。

* 参考文献：無し

登山の概要

主峰(7,429m)

1996年

9月～10月 南東面 日中合同偵察隊

日中合同登山隊が本隊派遣を前に、北面を偵察しようとしたが果せず、南面を目指した。10月1日ジーロン鎮(2,795m)からジーロン川左岸沿いに南下し、2,026m地点で川に架けられた一本の鋼線に吊下げられた竹籠に乗って右岸に渡り、この日はジャゾン(2,400m)泊。翌日北西の3,480m泊。3日ガヤがサンジュン氷河の下降点であるラド・ラ(4,632m)まで到達したが、日数不足と悪天のため断念

した。

[隊長：山森欣一(52) ガヤ(48)]

[ヤンラ・カンリ(7,429m)偵察記(山森欣一)「ヒマラヤ306号」平成9年5月号
ガネッシュ・ヒマール北面(山森欣一)
かいま見た巨峰の頂(山森欣一)「山と溪谷739号」1997年2月号]

1998年

10月 北面 HAJ隊

10月26日ルカにBCを建設。27日と28日に

北面のラマ・プー沿いに入山し、北面を偵察。合わせてランプー・カンリの南面を観察した。

[隊長：山森欣一(54) 樋上嘉秀(54) 太田康夫(45)]

[未踏の頂 カバン(6,717m)偵察報告〔付〕ヤンラ・カンリ北面を探る(日本ヒマラヤ協会カバン峰偵察隊)「ヒマラヤ326号」平成11年1月号 未踏の峰に憧れて チベット、カバン峰とヤンラ・カンリ偵察記(山森欣一)「山と溪谷763号」1999年2月号]

9-18 ルンポ・カンリ (冷布崗日・Loinbo Kangri)

* 山脈：カンティセ山脈の最高峰。

* 位置：ラサの西約633km。サガの北西約79km。チョンバの北東約54km。マナスルの北約130km。

[29° 8' N, 84° 6' E]

* アプローチ：ラサ(3,658m)からシガツェ(3,836m)を経てラズー～サンサン～サガ(4,516m)までは車で706km。2日間の行程。カトマンズ(1,303m)からシシャバンマの北山麓を経サガまで車で2日間の行程。サガから北のチャンジャ・ラ(5,218m)を越えた所がBC。車で1日の行程。BCの標高は5,200m。

* ルートの所要日数：不明。

* 山の概念：7,095mの主峰から東、南西、北東に尾根が伸びている三角垂状の山南東にはコルを挟んで6,645m峰がある。東にもコルを挟んで6,340m峰があり、南西に6,267m峰がある。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：「ルンポ」は神の名前。別名「ロボ」。

* 小史：1994年春にHAJ隊が初挑戦し北東稜の6,200mで登頂を断念。北面も試登した。96年秋に中国と韓国の合同隊が初登頂に成功した。

* 参考文献：[ルンポ・カンリ チベットの未踏峰・7,095m, 1994年試登の記録] 日本ヒマラヤ協会 1995年4月刊

登山の概要

主峰(7,095m)

1994年

4月～5月 北東稜 HAJ隊

4月20日チャンジャ・ラを越えた5,200m地点にBC建設。5,700m地点にABC、5月4～5日北東稜のコルの南側下6,000m地点に仮C1建設。翌日6,200m地点にC1建設。北東稜のルート工作を行うも、コルから数百m上はオーバーハングしており迂回ルートも堅い氷壁になり、このルートを断念した。その後、北面を試登した。

[隊長：八嶋寛(44) 後藤真(45) 新栞憲三(45) 桶川和気夫(44) 太田康夫(41) 瀬尾正敏(40) 正木直子(37) 北村俊之(31) 杉浦広幸(30)]

[ルンポ・カンリ(日本ヒマラヤ協会)1995年4月刊 ルンポの神を仰ぎて(八嶋寛)「ヒマラヤ274号」1994年9月号 ルンポ・カンリ試登7,095メートル(日本ヒマラヤ協会ルンポ・カンリ登山隊)「山と溪谷709号」1994年8月号]

1996年

9月～10月 中韓合同登山隊

チョム・カンリの初登頂を終えて入山。韓国側だけが初登頂に成功。

9-19 ナムナニ (納木那尼・Naimona'nyi)

- * 山脈：カンティセ山脈の最高峰。
- * 位置：ラサの西約633km。サガの北西約79km。
[30° 4' N, 81° 3' E]
- * アプローチ：ラサ(3,658m)からシガツェ(3,836m)を経てラズー～サガ(4,516m)チョンバ經由西面のBCまでは車で1,285km。4～5日間の行程。カトマンズ(1,303m)からシシャパンマの北山麓を經由しサガへ出てBHまで車で4～5日間の行程。公路の側がBHで標高4,700m。BHから徒歩4時間半でBC(5,600m)に到着する。
- * ルートの所要日数：1998年春のJAC福岡隊は、5月24日BCを建設、3つのキャンプを出して6月6日に隊員1名とシェルパ2名が登頂した。
- * 山の概念：7,694mの主峰から東西南北と北西に尾根が伸びている。どっしりとした山容の雄大な山である。南稜上に7,422mの南峰、北西稜上に7,447mの北峰がある。西稜上に7,427mの西峰がある。主峰の東北東6.1kmには、ナムナニ氷河を挟んで6,902mのグナ・ラ峰がある。
- * 通常の登山時期：春と秋
- * 山名：「メモ・ナム・ニーム・リ (勝利の子)」「ナイモナニ (何枚も積み重なった黒い生薬の山)」、「ダリチョウ (山の色がトラの縞模様に見える)」、チェライ・チュム (誰も登ることのできない山)」などがあるが、1985年の日中合同登山隊によって、正式に「ナムナニ」と統一された。サンスクリットでグルラ・マンダータと呼ばれている。
- * 小史：1905年夏にイギリスのロングスタッフは西稜の7,000mまで到達。36年春にはオーストリアのティッヒーが南西稜の6,600mまで到達した。開放後、85年春、日中合同隊によって西面氷河から初登頂された。
- * 参考文献：[ナムナニ (日中友好納木那尼峰合同登山隊) 毎日新聞社 1986年6月刊]

主峰 (7,694m)

1905年

7月 南西稜&西稜 イギリス隊

T.ロングスタッフはプロシュレル兄弟を伴い入山。7月20日南西稜の6,000m地点に到達。25日には西稜の7,000m地点まで達したが断念。

1936年

5月 南西稜 オーストリア隊

H.ティッヒーがシェルパのキタールを伴い入山。5月20日に6,600mまで到達したが断念。

1984年

4月～5月 西面&南面 日中合同登山隊

偵察を目的に入山。4月30日西面4,600mにBC建設。北西面のザロンマロンバ氷河に入り登路を偵察5,700mまで到達。南西稜に入り6,400mまで偵察した。

[日本隊長：井上治郎(38) 佐々木哲男(31) 吹田佳晴(34) 角谷弘司(28) 山田和人(24) 中国側隊長：劉大義(48) 曾曙生(45) 尚子平(44) 邹興禄(44) 聶金庭(52) 楊建国(28) 趙建軍(28) 王建民(報道7人)]

[日中合同納木那尼峰先遣隊1984年報告書 (日中友好納木那尼峰合同登山隊) 納木那尼峰 (日中友好納木那尼合同登山隊) 西チベットの未踏峰ナムナニに照準「岳人447号」1984年9月号]

7月～8月 北面 HAJ隊

偵察を目的に入山。7月25日西面4,430mにBC建設。27日ナムナニ氷河5,280mにACを建設。28日氷河上5,450mにキャンプを出して翌日5,900mまで達して、北稜とグナ・ラの登路を偵察した。

[隊長：山森欣一(40) 五百沢智也(51) 村上和也(29) 五百沢杉子(23) (報道4人)]

[チャンタン高原から聖地巡礼の旅 (山森欣一)「ヒマラヤ156号」1984年11月号]

1985年

4月～6月 西面 日中合同登山隊

登山の概要

4月25日北西面の4,700mにBH建設。5月4日ザロンマロン氷河末端5,800m地点にBC建設。同氷河右岸沿いに7日C1(6,100m)、11日C2(6,600m)、18日C3(7,260m)建設。25日第一次アタック隊の宋、ツーレン・ドルジェ、和田、吹田(啓)、金、ジャブー、松林、吹田の8名が初登頂に成功した。28日には、楊、チーミー、陳、曹、包も登頂した。

[日本側隊長：平林克敏(50) 斎藤惇生(55) 和田豊司(39) 吹田佳晴(34) 松林公蔵(34) 角谷弘司(28) 窪田順平(27) 吹田啓一郎(26) 山田和人(25) 岩田喬(24) 佐々木哲男(32) 中国側隊長：史占春(57) 劉大義(48) 尚子平(46) 宋志義(33) 楊久輝(33) 金俊喜(30) 陳建軍(29) チーミー(25) ツーレン・ドルジェ(26) ジャブー(26) 包徳清(22) 曹安(29) (報道6名)]

[ナムナニ(日中友好納木那尼峰合同登山隊) 毎日新聞社 1986年6月刊]

1990年

スイスのマルクス・イッテン隊長、ディゴ・ヴェリッヒ、ハンスリュエディ・シュタウブ、パウル・チャンツが、初登頂ルートから登頂に成功した。

1997年

アメリカ隊が新ルートを目指したが断念。

1998年

5月～6月 西面 JAC福岡隊

5月21日西面4,700mにBH建設。24日氷河下5,600m地点にBC建設。28日アイス・フォール下の6,180m地点にC1建設。30日氷河上6,800mにC2建設。6月5日7,300m地点にC3を建設し、翌日太田とシェルパ2名が登頂に成功した。

[隊長：太田五雄(57) 浦一美(51) 中山健(66) 徳永哲哉(42)]

[ナムナニ峰登頂(納木那尼峰登山隊) 1998年8月刊 清浄なるチベット高原 ナムナニ登頂と辺境巡礼の旅(太田五雄)「岳人615号」1998年9月号]

9-20 ララガ・リ(果巴隆・Gobarung)

* 山脈：ペクー・ヒマール山群。

* 位置：カンベンチンの南南東約7.3km。

[28° 5' N, 85° 6' E]

* アプローチ：ラサ(3,658m)からティンリ(4,342m)を経てシシャパンマ北山麓を経てBCまで車で3日間の行程。カトマンズ(1,303m)からは、車で2日間の行程でBC(4,650m)。

* ルートの所要日数：1985年岩手隊は、キャンプ2つを出して6,400mまで。

* 山の概念：主峰(6,671m)南東と北に長い尾根が派生している。

* 通常の登山時期：春と秋

* 山名：不明。

* 小史：1985年岩手隊が初挑戦。

登山の概要

主峰(6,671m)

1985年

4月 北東稜 岩手医科大学隊

4月4日4,900m地点にBC建設。7日ニーゼロー(5,200m)にABC、8日C1を北東稜の5,500m地点に建設。翌日2名が6,100mでビバークして6,400mまで達したが風雪となり、日数不足のため断念した。

[隊長：安井豊(51) 吉田昌男(59) 利部輝雄(49) 高橋俊紀(36) 後藤尚(38) 松井傑(29) 中村浩昭(25) 塩沢伸樹(23) 竹内一昭(21)]

■ 寸 感 ■

この春、世界最高峰に6人の日本人が挑む。ネパール側から亜大の野口健(25)。中国側から石川富康(62)、小塚和彦(39)と小林邦次(55)、福沢勝幸(59)、オサムラ・マサル(27)である。石川氏はイタリア隊に参加しているが、残る4人は国際公募隊への参加である。最後のオサムラ氏については、漢字表記ができないようにインターネットのホームページから得た情報である。

様々な角度から「ヒマラヤ登山情報センター」の早期の設立が望まれている。このままでは、あっという間に、数多くの先輩達が営々として築いてきた「登山文化」の一端が消えるだろう。(山)

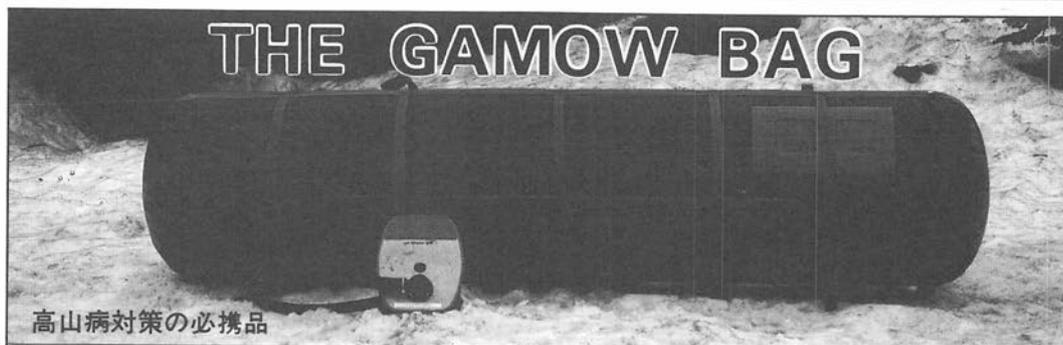
事務局日誌(4月)

- 1日(木) 中国大使館ビザ申請
- 3日(土) チベット連続隊合宿(山森宅)、チョム・カンリ隊合宿(ルーム)
- 4日(日) 第6回「高所登山 事故と環境対策研修会」(豊島区民センター(60名))

- 8日(木) 理事会通知発送。
- 9日(金) ヒマラヤ330号発送
- 14日(水) アメリカ、J.ヒューズ氏来会し、ギャラ・ペリの件。
- 15日(木) 北京倶楽部、赤羽氏来会し、中国中央電視台「ヒマラヤ100年」の件。
- 26日(月) 東京集会(23名)
- 27日(火) 山森専務理事訪中
- 30日(金) 寺沢常務理事訪バ

ヒマラヤ No.331 (6月号)

平成11年5月10日印刷 11年6月1日発行
発行人 稲田定重
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社*

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



Royal Nepal Airlines

The way to Nepal ロイヤル・ネパール航空旅客代理店



SINCE 10th Dec. 1973

株式会社 西遊旅行

25 years with

exciting countries

SAIYU TRAVEL CO.; LTD.

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のバイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING / SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい

(通話料無料)

0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.gol.com/saiyu/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店 / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店 / 〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店 / 〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店 / 〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア一館 / 〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店 / 〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店 / 〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店 / 〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店 / 〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店 / 〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店 / 〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店 / 〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店 / 〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店 / 〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店 / 〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店 / 〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店 / 〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店 / 〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店 / 〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー) / 〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所 / 〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004